ハルマーはお母さんに抱きついて、
『僕がほんとうに悪かつた、これから何でもお母さんのお言葉はそむきません』
と泣きながら誓ひました。
それからハルマーは、生れ變つたやうな、すなおな子供になりました。

四、藤八爺さん

藤八爺さんは、町内一番の丈夫自慢で、頑固屋であります。
今年六十二ですが、家内の者の止めるのもきかず「慣れた仕事が仕様い」

といつて、人力車を曳くのであります。
去年の夏少し曳くのを止めた時にも、
『晩の酒がまずい』
と、いつて二十日ばかりして、復曳きだしたのでした。
相撲が大のすきで、いつの相撲にも、はだぬいで、鉢巻をして奴鳴つてゐる藤八爺さんの姿を見ぬ事はない程です。
一昨年の秋の花相撲は又、藤八爺さんのばかに力を入れたもので、桟敷の下の藏八爺さんの上から酒杯が落ちて來て、爺さんの藥鑵頭にこつん當つて飛んだが一向平氣で奴鳴つてゐる。あまりの滑稽に隣の客がふき出した

時丁度爺さんの力を入れてゐる、力士が負けたので、其客は爺さんの開手で頬を一つ見舞はれた。此話は相撲見物の一つ話しとして今にのこつてゐるのであります。

藤八爺さんは目に一丁字もない。いつも

『おれは、一字も知らんが、何にも不自由はない』

といつて、孫の復習時間を惜むのでありました。

『字は、はんじても讀める』

ともいつてゐるが、やはり當にはなりません。

或時、孫の幸一が、爺さん此字を當てごらん『乙』

うむ『釣針といふ字だ』

『なんのおつといふ字だ』

『8は』

『釘拔きだ』

『數字の八だよ』

『○は』

『饅頭』

『れいだよ』

『太はどういふ字だ』

『せんきといふ字だ』

『なあに太郎の太だよ』

『爺さん一寸も當らないなあ』

或日、日暮れてから車を曳いて通る後から、お巡査さんが、

『おいこら、夜間無燈でなぜあるく、』
何と思つたか藤八爺さん、いきなりお巡査さんの頰ぺたを開手で一つ見舞つた。
警察へ引つぱられて、部長さんの調べを受けても、何でも巡査が悪いといひ張つてをります。
よく〳〵調べると、
『おれのことを、藥鑵、無燈でなぜ歩く』
といつた、
『いくら頭が光つて居てもいらぬお世話だ、人のことを藥鑵とは何だ』
といふのでありました。巡査を呼んで、聞いて見ると、

『夜間、無燈でなぜ歩く、』
といつたとのことでした。
部長さんから、懇〳〵と其譯をいひきかされ。
『やつぱりおれが、無學だから悪かつた』
と、頭かき〳〵引下りました。
それから、孫の學科の復習には、少しも小言を云はないやうになりました。

四）手の活用實例

○イ、海原又は廣き野原を表す場合
兩臂を充分伸して前に上げ、掌を下に向け、伸したるまゝ左右に靜かに開きて、原の位置に復す。

○ロ、舟などの進行するを表す場合

右手を掌を伸して腰帶の邊にとり、口にて「すう―」と云ふと同時に、自己の左前の方に充分出して原に復す、

○ハ、舟の先端にて波の切らるゝを表す場合

兩臂を前に伸して兩掌の先を合せ、口にて「ちやちやや、〳〵」と云ふと同時に、兩掌の先を離してへの如く後方に引き、掌を振動させつゝ、波の切らるゝ如くす。かくの如く何回も繰り返す。

○ニ、汽車の發車を表す場合

『口にて「ピリピリー」『ピュウ』と云ひ、次に口にて『プオウ〳〵』と云ふと同時に、右掌を躰に近く漏斗狀に

開き、次に右掌を三寸程前に進めて前同樣に開き、次に、復三寸程進めて同樣になし煙突より煙の出るを表し、最後に右掌を充分次第に前に伸し汽車の進行を表し原に復す。

○ホ、波の動くを表す場合

右手を大きく上に擧げ前方にて、波の動搖する形をなし、何回も繰返す。

○ヘ、障子、唐紙等を開くを表す場合

兩掌を前にて合し、口にて『スウー』と云ふと同時に心有らしつゝ、兩掌を二尺程離す。

○ト、物の水中に飛込みたるを表す場合

口にて『ドボン』と云ふと同時に、拍手をなし、右掌を急に右下に下ぐ

○チ、犬の尾を振るを表す場合

右手の手首關節の力を拔き、掌をふら〳〵と振り動かす

○リ、山の形を表す場合

右臂及掌にて自己の左前より右前に山の形を描く

○ヌ、上より袋等を被らすを表す場合

口にて『スポッ』と云ふと同時に、拍手をなし、兩掌をハ形に下げ其形を表す。

○ル、雨の降るを表す場合

兩臂を前上に擧げ、臂と掌にて上方より、下方に、雨

の降るを形容す。

○オ、大砲等を打つを表す場合

口にて『ドウン』と云ひ、暫らく先方を直視し、次に口にて『パッ』と云ふと同時に目の前にて、急に右掌を開く。

○ワ、人を毆打するを表す場合

右手を振り上げ、毆打する如くし、左側にて左掌と右掌とを打ち合せ、下にさげ、次に兩手にて頭を押へ打たれたるを形容す。

○カ、電光を表す場合

口にて『ピカ〳〵』といふと同時に最も敏活に右臂を

上げ右臂と右掌にて、右上より左下に形を描く。

(五) 附錄

講演活用

教育的一口噺

以下擧げる十の一口噺は、普通の講演、演說中、適宜の塲合に挿入し、興味を添へる爲に選んだものであります。

一、石屋と醫者

太郎さんの家の別莊は、蒲郡海岸にあります。暑中休暇で、學校もお休みになりましたので、太郎さんは、お母さんに連れられて、別莊へ行きました。

六日目の朝八時二十分に、

『ヨイイシヤスグ　ヨコセ』

との電報が屆いたので、別莊の普請でもするのだらうと、東京で名高い石屋を別莊へ遣りました。石屋が別莊へついた時、太郎さんの枕邊には、大勢人が集まり、氷で頭を冷やし、太郎さんは、うん〳〵、呻吟つて居ました。

二、生活一變

昔、仙台公のご臣に、大沼といふ人がありました。何かの失敗が原因で、浪人となりだん〳〵落ちぶれて、乞食同樣になり、毎日溜息太息で、ごろ〳〵寢てばかりゐました。

或日のこと右手に蠟燭に火を點けて持ち、左手に美し

い玉を持つて立つてゐますと、不意に風が吹いて來て、蠟燭の火が消え、間もなく、左手の玉は、粉な、微塵にくだけてしまひました。はつと思ふと、目が醒めました大沼は、

『噫なさけない夢を見た、これから、どんなに不仕合せが、つゞくかも知れない。此上は死ぬより外にしかたがない』

と覺悟を定めて、檀那寺に行き、先祖の位牌の前で、切腹しやうとすると、住持の和尚は飛んで出て、切腹を止め、夢の話をきいて暫らく腕拱いて考えてゐましたが、ぽんと手を打ち、

『これは、結構な吉夢でご座るぞ』

『えゝ吉夢とな』

『されば、一首の歌が浮びました。お聞きなされ、』

『今迄の貧しきことは消え果てゝ、原の知行を下し給はる』

『この通り立派な吉夢でご座る』

大沼は此歌を聞き、大喜びで家に歸り、あんな吉夢を、惡夢と思ひ切腹しやうとしたのは誤りであつた。原の身分になれるのは近い内だらうと、それから、大元氣で、武藝やら、學問やらを勵みました。

殿樣は、大沼の樣子のすつかり變つた事を聞かれ、呼

び出して原の知行を、當て行はれました。

三、説教の聞きそこなひ

お熊婆さんは、大の慾深かで、お寺詣りは大嫌ひでありました。

お竹婆さんに無理に連れられて、お説教を始めて聞きにいきましたが、こくり〳〵居眠りばかりしてゐました。

和尚様は、一段聲を高めて、

『わがよきに、人の悪きはなかりけり、人の悪きはわが悪きなり』

といふ、歌をよまれました。

此歌ばかりは、お熊婆さんの耳に入りました。

大急ぎで家に歸りまして、隣の割木をごん〳〵運びますので隣の人が咎めると。婆さん平氣で

『和尚様がお説教で

『人の割木は、わが割木なり、』

といはれました。』

四、辨財天かん

大黒屋の主人は、大のご幣擔きであります。

『今日は元日だ目出度い〳〵』

と無暗矢鱈に目出度がつてゐました。

すると家の前の門松にもたれて、

『ウーン』とてんかんを起して倒れた乞食がありました。

ご幣擔ぎの主人は、びつくり仰天
『こりや縁起が悪いごうしたらよからう』
と心配してゐますと、隣に住んでゐた俳偕師が『これは
大層縁起のよいお目出度いことだ』
といつて、
『門松に、もたれて泡を福の神、これぞまことの辨財天
かん』
といふ狂歌をよまれました。
其後大黒屋には、よいことばかり續きました。

五、九郎義經

武藏坊辨慶は、何をしても義經に叶はないので、殘念

に思つて居ました。
或日、義經と辨慶は、退屈凌ぎに一時のうちにソツクイを澤山造る競爭をしました。
義經は、板の上にお飯粒をのせ、一粒々々練り始めました。
辨慶は、手拭で鉢巻をし、手に唾をつけ、大摺鉢に澤山ご飯を入れ、摺古木で大汗流しごん〳〵摺り出しました。
一時經つて、義經は澤山のソツクイを造りましたが、辨慶のは、何時迄過ぎても、ぶつ〳〵してゐて、ソツクイにはなりませんでした。
或日辨慶は、義經のお供をして、或處へお客に行きま

した。

お茶菓子に澤山の羊羹が出まして、義經は便所に行きました。

その隙に辨慶は、羊羹を取つて、

『むしや〳〵

食べました。

外でちらりと見た義經は、席に戻り、

『辨慶が、つまみ食ひする、いやし坊』

と讀みました。辨慶早速

『それを知らずに九郎義經』

義經は

『今日ばかりは、俺が負けだ』

といひました。

六、柿本人麻呂

こゝは、桃山ご殿の奥庭、秋の中ばのこととて、雪見燈籠の彼方の紅葉は火のやうに美しく、下の泉水に影をうつし、石橋のもとの高い柿の木には、枝もたわむ程大きな實がなつてゐます。

秀吉公のお氣に入りのご臣、曾呂利新左衛門柿の木に登つて二つ三つ取つて喰べた頃、向ふの座敷の障子が「すう」と明いたので、新左衛門は、「はつ」と驚ろいて、木から『する〳〵』と下りて、木の本に小さく、圓くなつ

てゐますと、秀吉公は、お縁側に立出でられて、
『柿の本に人圓く見えたり』
と申されました。新左衛門、すかさず、
『人麻呂ならで、顔は赤人』
と申し上げると、秀吉公手を打つて感心せられ其罪を許されました。

七、鍬盗人

俳諧師の家に、富さんといふ下男がすんでゐました。お酒を飲まねば暮らされんといふ、悪い癖がありまして飲みたくなると、どんな物でも自分の物を賣つて酒を買つて飲むのでした。

もう何にも賣る物はなく、酒は飲みたく、苦しくて堪らなくなつたので何もかも忘れて、主人の鍬を賣つて酒を買つて飲んでしまひました。主人はこれを知つて、富さんを呼び出して、調べました。富さんは早速、
『俳諧の家に居りやこそ鍬(句は)盗む、隙(鋤)があつたら、またも盗まん』
といふ歌を作りました。
主人の俳諧師は、大層感心して、罪を許してくれました。
富さんも、主人の心の大きいのに感心して其後酒を飲まないやうになりました。

八、はきもの無用

太郎兵衛爺さんは、信心家で、大層正直屋でありました。或時京都見物に行き、或お寺に參りましたが、上り段の處まで來ると、太郎兵衛爺さん何と思つたか、着物を脱ぎ、丸裸体になつて入つて行きます。

監督人が咎めると、彼處に

『こゝよりは、きもの無用』とあります

からと、答へました。

下の札には、ここより、はきもの無用としてありました。

九、註文違ひ

お徳婆さんは、大層佛教信者であります。

じゆづを註文するに、

『二つにおり、てくびにはまるじゆづ』

と書いてやつたのを、

『二つにおりて、くびにはまるじゆづ』

と讀み、大層長いおじゆづを拵へてくれました。

十、田分け坊主

門前のお民さんは、えらい嫉妬女でありました。

お寺の和尚さんは、これを矯正してやらうと或時小僧に

『お持ち合せの燒餅二切れ三切れ下さい、』

といふて、貰ひにやりました。

お民さんは、或日お寺に來て『三人の息子が田の境を

爭つてなりません、これを公平に分けて下さい』と申します。和尚さんは、

『そんなことは私の知つたことでない』

と申しますと、お民さんは、

『それでも、あなたのことを、人が田分け坊主〳〵といひます』

と云ひました。

震災お伽噺

春雄の行衛

春雄は、愛知縣豐橋在の生れです。大正十二年の三月、尋常小學校を、優等で卒業し、兄さんが、東京の本所、兩國停車場前に奉行してゐるので、自分も東京淺草の或家に奉行する事になりました。

豐橋停車場のプラットホームには、上り列車を待つ人の垣を作つてゐます。

暫らくして、上り列車は乘客の前に止りました。

『豐橋々々』と呼ぶ聲、辨當、新聞、煙草、お茶などを賣る人の呼び聲、降る人、乘る人、入亂れての混雜をボンヤリ見恍れてゐるのは、春雄です。

お父さんに促されて、急いで中程の三等車に乘り込みました。

とたんにドアは强く閉ぢられ、車掌の相圖と共に汽笛一聲、汽車は黑煙を吐き〳〵東へと進みました。

東京驛についたのは、其日の夕ぐれ、兄さんは二人を迎へのため、出口に佇んでゐました。

それから電車で、目的の家に着き、翌一日は番頭さんの案内で、お父さんと一しょに東京名所のこゝかしこを

見物して、其翌日お父さんは故郷に歸られることになりました。

電車停留所で、お父さんの乘つた電車を見送り、番頭さんに手を引かれた時は、さすがに胸一ぱいで、熱い涙が頰につたはりました。

馴れるに從つて、春雄は一生懸命に働きますので、人々に可愛がられ、月日の經つのも忘れてゐる位でした。

……

九月一日の正午近く、春雄は店で何や、かや働いてゐると、

『ごん〳〵〳〵』

『ぐら〳〵〳〵』

『それ地震だ』といふ聲に外に飛び出して見ると、これは大變、筋向ひの家は倒れ、ごの家も〳〵『ぐら〳〵〳〵』大きく搖いでゐます。道路は飛び出した人で錐も立たない混雜で、右往左往只わい〳〵騒いでゐるばかりです。

誰かの『淺草へ〳〵』といふ聲に言ひ合したやうに、淺草觀音さして駈け出しました。

『火事だあ〳〵』の聲は此處彼處に起り救を呼ぶ聲は四方に物凄く、春雄は人心地もなく、走るともなく走つて大きな西洋建ての前まで來たとき、其建物は道の上に倒れかゝつて『みし〳〵みし〳〵』

と次第に傾き、中央の煉瓦は『ばら〳〵ばら〳〵』と道に落ちかゝり、危險は喩へやうもありません。

無我無中で、此處を駈け拔けた頃、

『がら〳〵がら〳〵ごしやん』打倒れ

『助けて』と呼ぶ聲は耳に喰ひ込むやうに聞えました。

『火事だあ〳〵』

の聲は、益々加はり、火の粉はごんごん頭の上から落ちかゝります。

やつとの思ひで、淺草の觀音樣まで駈け付けた頃は、廣ひ境内も、はや人で一はい少しも寄りつけない。

『此處は駄目だ、上野へ〳〵』といふ聲に、又人に押さ

れて、上野公園方面へ向つて駈け出しました。
後で聞けば、淺草觀音境内に避難した人々は四方から、焼き立てられ、焔に巻かれ火の粉をかむり皆焼け死んだとの事、逃げ込まれなかつたのは何といふ仕合せだらうと皆喜びました。
あの高い〳〵十二階の建物も中途から折れ碎け其下の二三十軒の家々は、無惨にも、目茶〳〵になつたとのことです。
春雄は、押しに押され、漸く上野公園迄着きました。
髪のこげてゐる人、顔から血を流してゐる人、親を泣き尋ねる小供、負んだ小供を落したと云て、狂氣のやう

になつてゐる人、まるで、此世の事とは思れません。
市中は何十ケ所の火の手で天もこげんばかり、泣き叫ぶ聲は、地獄の聲かとばかり思はれます。
其内に人は益々加はり、物凄い勢で押し寄せた人浪の爲に、春雄は、あはや押し倒され大勢に踏みにちられ
『うむ』
と氣を失つてしまひました。
暫らくして、人心地ついたとき、一人の二十五六の書生風の人に助けられてゐるのに氣がつきました。
春雄は、地獄で佛と大喜び、それから、四晝夜、此人の親切なお世話によつて命を助かり、五日目に此人に連

れられ、山の手線の汽車に乗り込んだ時『しつかりして行き給へ』と聞えたばかりで、物凄く押し合つてゐる群集の中へ紛れ込んでしまはれました。

只記憶してゐるのは、『神田お徒町の山田』といふ事だけで、他は一切夢のやうであります。

乗り込んだ汽車の人込みは又言ひやうがない中は勿論、車体の上迄人で一ぱい人の乗れる所は、どんな所でも乗り込んでゐるといふ騒ぎです。

疲れやら、恐ろしさやら、で其後何處を、どう通つたのやら夢中でした。

『岡崎々々』

といふ聲に、『豐橋近くなつた』と思はず生き返つた心地、豐橋に降りて、ボンヤリ立つてゐると、後から、『春雄』と言ふのはお父さん、『はつ』と思ふと抱きついてゐました。

お父さんの目には涙一ぱい、春雄は唯泣くより外はありませんでした。

大急ぎに急いで、家に歸れば、弟や隣の人達は、四方から春雄を取りまいて、只

『よかつた〳〵』といふばかり。

お母さんは病氣で寢ておられるとのこと春雄の來たのを聞いて、奥から匍ひ出て泣いて喜ばれました。

まだ心配なのは、本所の兄さんの事、幾日待つても、音沙汰もありません。

新聞で見ると、本所龜澤町には、被服本廠跡と云つて二町に三町程の廣場があつて、近くの人は、皆此處に避難したが四方からの焔の爲に三萬何千かの人が燒け死んだとの事ですから、兄さんも多分此廣場で死んだのだらうと、家中毎日念佛ばかり唱へて居ます。

春雄の兄さん

春雄の兄さんは、兩國停車場前の、雜貨店に、奉行してゐました。

九月一日の大地震に、夢中で外へ飛び出た時は、道は人で一ぱいでありました。

地震は益々劇しくなつて來るので、人々は龜澤町の、被服本廠跡へ避難すべく、皆一散に駈け出します。そこは二町に三町の廣場ですから、誰しも安全な避難所と思つてゐます。

春雄の兄さんも人に押されて、そこをさして急ぐ、曲り角の所から二十間ばかりはなれた頃、荷車に引懸つて倒れた女の上を群衆は踏んで走る。

『助けてい〳〵』

と呼んでゐるが誰もふり返つて見る者もありません。

本廠跡へ着いた頃は、もう人で一ぱい其中には箪笥や
ら、長持やら、色々の荷物も運び込まれて、混雑は一通
りではありません。
春雄の兄さんは、人を押し分け漸く廣場の中程に入り
ほつと一息つき傍の荷物に寄りかゝりました。
『此處なら大丈夫だ』
と云ふ聲は、至極力強く聞えます。
、此處は三方煉瓦塀で取り圍まれ、火の力も此處までは
及ばぬらしく、避難者も一様に一先づ安堵の胸を撫で下
したらしくありました。
嗚呼何ぞ知らん、此處こそ、魔の手の要、生地獄中の

生地獄、東京中で燒死者の一番多かつた處なのです。
火焔は四方から攻めかゝり、火の粉は火の雨焔の霰、
火にあふられた空氣は百五十度の熱さで此中の群衆を苦
しめます。
苦しさに堪え兼ねてあちらへ逃げ、こちらへ逃げ倒れ
て踏み殺される數も中々多く、泣き叫ぶ聲は此世の聲と
は聞えません。
折から起る旋風に火のついた戸障子、柱など、ごん〳〵
火の雨と共に降つて來る、運ばれた荷物は、あそこでも
此處でも燃え始める、
灼熱地極の苦みを受けて燒死ぬ者は何萬といふ程、此

處を監督せられた、相生橋警察署の署長さんは、責任を重んじて、切腹して死なれました。

春雄の兄さんが、此處から逃れ出たのを見た人は誰もありませんでした。

講演指針 教訓お伽口演集 終

大正十三年四月十日印刷
大正十三年四月十五日發行

『定價金五拾錢』

◇著者 可笑庵秋月◇

◇發行者 大阪市東區本町四丁目四番地 石塚猪男藏◇

◇印刷者 大阪市西區阿波座三番丁 堀田助一◇

發行所 大阪市東區本町四丁目 振替口座大阪一三六七五番 石塚松雲堂

不許複製

文學士　中村德五郎著

傳說 面白い日本歷史のお話 全十二冊

小四六判形美本挿畫十數枚
各冊 定價 金八拾五錢 郵稅八錢

第一卷 神代の卷　第二卷 上代の卷
第三卷 中古の卷　第四卷 源平時代の卷
第五卷 鎌倉時代の卷　第六卷 南北朝の卷
第七卷 室町時代の卷　第八卷 戰國時代の卷
第九卷 江戸時代の卷　第十卷 幕末維新の卷上
第十一卷 幕末維新の卷下　第十二卷 明治大正の卷

諸君よ今日世界に於て眞正の帝國と言へば唯我が日本帝國のみではありませんか、我等日本の國民は實に幸福と愉快ではありませんか金甌無缺の國體萬世一系の皇統之を我日本以外に求め得られない今日!!忠臣義士、孝子節婦、英雄豪傑、智者、學者を始めとして諸君の遠き先祖近き親族が何う言ふ事をせられたか實に面白い愉快の進歩發達一から十まで漏れなく書き記して三千年の昔より大正の今日迄而かも繪入で面白く誰にも解るやうにお話してあるのは特色で本書を繙き給はゞ必ず先づ大政治家と膝を交へて語り大學者、大實業家、大教育者、大軍人、大宗教家、大經世家を一室に集めて其實歷談を聞きつゝある以上の大愉快を本書に於て初めて得らるゝでありませう本書一冊の價値は實に幾百千卷の書冊よりも遙かに有益で類書を超絕し天下空前の一品であります

內容體裁完全日本歷史の趣味は本書にあり

發行者　大阪市東區本町四丁目四番地　石塚松雲堂

終